

6—12年装置 140例)においては、発癌、あるいは組織細胞の異型化は認められなかった。

強異物性の持続に、微弱放射能などの要因が加わると、発癌の起きる事が示唆されて居る(森らの造影剤 ThO_2 による発癌報告)。生体反応の示標としての細胞浸潤は、塩化ビニール38%, 天然ゴム26%, nylon 17%, polyethylene 13%, polyethylene-metal 19%であった(挿入前は13%)。

著者らはさらに生体反応の少ない医用シリコンより、Phycon X ring を開発試作し、IUCDとして用い得る事を確めた。それは煮沸消毒の反復可能で、耐久性にすぐれ、X線撮影可能である。

147. IUD に関する二、三の臨床的考察

(東京大) 揚 正義, 我妻 堯

(東京警察)

荒井 清, 畠山 良弥, 千野 憲司

(東京日立) 辻 啓

IUDの作用機序解明のため、われわれは主として

Lippes loop を用いて臨床的研究を行つて来た。現在までに loop を挿入した者は、1,104例で、観察期間は最大約3年間である。再挿入を含む現在のIUD保有者は935名である。

挿入前および6乃至12カ月間隔で smear を追跡検査した171例において、loop 挿入による smear 所見の変化は特に認められなかった。

Loop 挿入後1乃至2年で loop 交換に際して子宮内膜の組織学的検査を行つたものが31例あつたが、その中全く病的変化を認めない正常内膜を有していたものは24例であつた。亜急性乃至慢性炎症の像を示したものが6例、萎縮性内膜を持つたものが1例あつた。

Loop 挿入直前、直後および一定日時経過後に細いビニール・チューブを子宮腔内に挿入して、pressure transducer により子宮腔内圧曲線を記録した。Loop 挿入直後は子宮のトーンスが上昇し、収縮も頻繁にみられたが、約十数分後にはもとのトーンスに戻る場合が多かつた。しかし収縮周期は対照よりも増加していた。

第10群 種々なる問題

148. 婦人科手術患者の心身医学的考察(その1)

(慶大)

板倉 啓夫, 岩淵庄之助, 村田 高明

(神奈川・川崎市立)

山本 浩, 林 茂, 落合 寛

長田 宏, 岩田 嘉行, 高橋 正敏

佐藤 和也, 丸山 浩, 浅岡 健

およそ疾患の発生は身体的侵襲に止まらず心理的にも負担を強制するものである。特に産婦人科においては手術という治療手段が女性の性の象徴に対して行なわれるので、その喪失による劣等感や手術による身体の保全の危機感や術後の健全なる家庭生活への保証などに根ざした情動不安などを示し術後における心身症、神経症、頻回手術などの不幸な転帰に陥ることが多い。今回川崎市立病院婦人科において術前術後一年間にわたつて長期に心理学的立場から手術患者を観察し、手術というストレスに対していかに心理的影響があるかを研究し始めた。今回は、その術前における心理テストにつき一部を報告したい。

対象106例にCMI, YG性格テスト, 精研式文章完

成テストを試みた。

年齢分布は身体的条件と、家庭環境の条件を考慮するために行つた。1)~35才まで……46例 2)36~45才46例 3) 45才以上……14例である。

CMIの分布をみると神経症および神経症化の傾向のあるⅢ・Ⅳ領域は37%にみられ、CMIとYGとの関連にてはⅢⅣ領域に情動不安などのYGB・E型が多くみられ性格の歪みがうかがわれた。また、手術別とCMIとの関連においては、全別にて51%、帝切にては33%のⅢ・Ⅳ領域がみられた。(健康対象は15%内外)

医学的了解の下に手術をうける患者においても情動的不安が多く、これは全別術のごとき象徴の喪失や新たに生命の誕生なる帝切に著明であり、以上より、特に手術患者に心理的面への医師の関与が望まれる。

149. 分娩を契機とする不定愁訴症候群について

(鹿児島大)

森 一郎, 伊集院康熙, 新川 康子

思春期や更年期のような性腺機能の転換期には、自律神経機能失調様の不定愁訴を訴えることが多いため、両